
三題噺「缶コーヒー殺人事件」

三木こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題噺「缶コーヒー殺人事件」

【Nコード】

N2538T

【作者名】

三木こう

【あらすじ】

缶コーヒーを投げた、彼。

その結果、人が死んでしまった！？

缶コーヒーを投げた、女の子にぶつかった。

「……えっ？」

素っ頓狂な声をあげてしまう。それほどまでにショッキングな光景。

つまりは、中身入りの缶コーヒーを頭にぶつけ、血を流して倒れこんでいる女性の体。死んでいるかどうかの確認はまだ出来ていないが、あの出血量はただ事ではないというぐらい俺にもわかる。

「いやいやいやいや」

頭の中では缶コーヒーで人が死ぬはずがないと否定していたが、目の前の現実はそのも言っていないような差し迫った状況だった。たしかに頭にあたったような気がする。そしてすぐさま倒れこんだような気がする。

「俺の、せいだと」

声に出してみたところで、もちろん誰も応えてはくれない。

ただ少し、夜食のお共にとアパートの前に飲み物を買に出かけ……。そして、間違って買ってしまったホットコーヒーを、あまりの残暑でイライラしていた俺はゴミ箱に向けて投げ捨ててしまったのだ。

アパートの目の前ということで、大学入学時から使用し続けたおかげなのか、目を瞑っていてもゴミ箱に空き缶を投擲できるようになってしまったのが原因かもしれない。周りの状況確認が甘かったせいなのかもしれない。人を……殺してしまったのか。

「と、とりあえず、血でも止めないと、応急処置、応急処置」

しかし、そうやって起きてしまったことに頭を悩ませていてもしかたないと、アパートの部屋に戻り慌ててタオルを探す。

「なんで、ないんですか」

テンパリ気味のせいか、微妙な丁寧語になってしまった。年をと

って独り言が増えたとか、そういうレベルの話ではない。ちょっとは声にだして咳いてみたりしないとやってられないのだ、コンチキシヨー！

「なんつうか、小学校で鼻血を出した子のを拭き取らされる気分だぜ」

というのも、俺が迷った挙げ句家から持ち出したのは箱詰めの特イッシュだった。タオルは残念ながらすべて洗濯機の中で回転なのだ。だらけた男の一人暮らしが原因の悲しい現実。

「あの……大丈夫ですか？」

ビクつきながら、そーっと血がドクドクと流れ続ける頭頂部分の周りを拭いていく。ティッシュの吸水力はさすがだったが、いかせん薄すぎる。

仕方なく高速でスナップを利かせながらの連続大量投入。

血の海はティッシュの海になり変わり、とてつもなくシユールな光景となってしまった。視覚的にはちよっぴりシヨッキンクな雰囲気や和らいだが、なんだか申し訳ないというか、今さらながらの罪悪感に襲われる。

「いやいやいやいや、救急車、呼ばないといけなくね？」

そもそも一番最初にそうするべきだった。

けれど、頭の何処かでその選択肢を除外してしまっていたのは……この事件が露呈することを恐れていたせいなのだろう。

「どうすんだよ、内定チャラじゃねえか、折角この不況に頑張ったのによ。っていうか大学も退学だよな」

広がっていくのはとてつもなくネガティブなイメージ。親に勘当され、行く宛もなくさ迷い歩くぼろぼろの姿が一瞬現実のように視界を埋め尽くした。

「に、逃げねえと……そもそも、俺、なんもやってねえし、缶コーヒー買いに来ただけだし」

そっと拾いあげるのは、血まみれの缶コーヒー。大人のブラックなんてアオリ文も、今となってはシャレにならない。皮肉なことに、

熱々だったホットコーヒーも適度な冷たさになっているようだ。

そそくさと、心臓をドキマギさせながら、アパートの階段を上り自室へと退避する。その一瞬が永遠のように続いたその時、遠くから聞こえてくる音があった。

ファンファンファンファンという、消防車だったか、警察だったか、救急車だったか、のサイレン音だ。しかもこちらに近づいてきているらしく音が大きくなっている。

「お、おまえも野次馬してんのか？　なんかこの辺で事故があったらしいぞ？　んで、ひかれた人がなんか、逃げてった車を追っかけていったとかって、ひやー根性あるやつだよなって、話題で持ちきり。ネットとかでも探しに行こうぜってなっってちよつとした祭りだぜ」

「え、あ、そうなの」

なんとか、突然隣の部屋から飛び出してきた友人に適当な相槌をうつ。廊下で立ち止まりながらしばらく、友人の話を咀嚼するように考えを巡らせる。

うん……俺、じゃなかったんだよな。そりやそうだよ、幾ら何でも缶コーヒーで殺人なんてごめんだ。

「おい、てかうちのアパートでかよ！　近いとは聞いてたけど、うわー、警察と救急車……。ん、なんか現場がティッシュまみれだったよ。変態というか奇怪というか、なんか猟奇的な臭いがするぜ。ちよつと見に行こうぜ、被害者には悪いけど」

「……ごめん、俺、お湯かけっぱなしだから」

少し前方の自室の窓から聞こえるのは、カップ焼きそばを作ろうと沸かしっぱなしのやかんの音。

とにかく、部屋に戻ったらアツアツに沸騰したお湯で焼きそばを食べよう。うん、猟奇的な犯行の一部に参与したことなんて忘れてしまおう。

うん、できることなら、お湯と一緒に流してしまいたい、なにもかも。

(後書き)

お題、「缶コーヒー、ティッシュ、沸騰」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2538t/>

三題噺「缶コーヒー殺人事件」

2011年8月1日03時34分発行